



耐久高校図書館には、係の先生が司書も含めて6名います。先生方が高校生の時、あるいは大学生の時、どんな本を読んでいたか、また、本について、耐久生の皆さんに伝えたいことを語ってもらいました。まずは図書館長の稲垣先生から登場していただきます。

## 私が今まで読んだ本をいくつか紹介

～私の読書傾向は・・・～

稲垣 貴子

高校生の時に読んだ本はいろいろあるけれども、印象的な1冊をあげるとすれば文豪・谷崎潤一郎の『春琴抄』だ。私のライフワークである、正確には、ライフワークにしたい朗読との出会いとなった作品だ。高校生の時、放送コンテストの朗読部門で全国大会に出場した。その時その一節を朗読した作品だ。今から思えば、よくまあこの作品を選んで朗読なんかしたものだ。あの時どんな風にこの作品と向き合っていたのだったっけ・・・。



物語は、旧家の令嬢、美しき盲目の三味線奏者春琴と彼女に仕える佐助のラブストーリーだが、その愛の形が独特だ。春琴は佐助を奴隷のように扱う。春琴の三味線の弟子でもある佐助に泣くほど厳しい稽古をつける。それでも佐助はひたすら献身的に春琴に

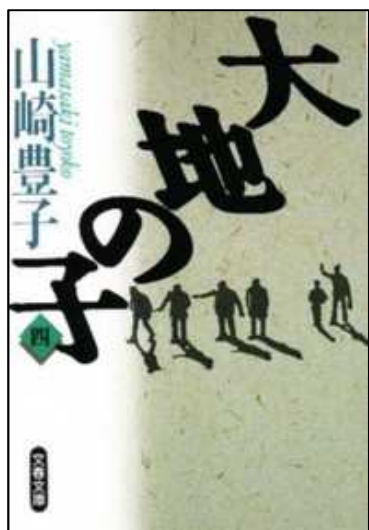
仕える。傲慢で気性の激しい春琴だが、ある事件で弱音を吐く。何者かに熱湯をかけられ、顔に火傷を負った春琴は佐助にその顔を「見んといて」と言う。このとき佐助は自分の目を針でつぶして春琴の火傷を負った顔を一生見えないようにし、その後も春琴の身の回りの世話をし続ける。このふたり、何とも不思議な心と心の通わせ方だ。

また久しぶりにその文章を眺めてみてびっくりした。句読点が少ない。カギ括弧が使われていない。高校生がこの小説の世界を朗読で表現できるのか。あれからずいぶんと月日が流れたが、今思い返しても、まったくもって高校生には無謀な朗読課題作品であったのではないかという感想を持つ。

私は今NHKアナウンサーが指導してくれる朗読講座を受講中であるが、いつの日か、高校生の頃には到底できていなかった谷崎潤一郎作『春琴抄』の、その小説の世界を表現する魅力的な朗読を実現させたい。

2013年9月29日、尊敬する作家、山崎豊子がこの世を去った。何が尊敬できるかって、山崎豊子は事実即した数々の小説を残したが、1つの作品に対する取材が半端ないことだ。徹底的に取材し、膨大な資料や長時間の録音テープと小説の設計図を準備して書き上げたそう。取材したときの状況を思い出し涙しながら書いた場面もあったという。だからこそ書き上げた小説には説得力と重みがある。

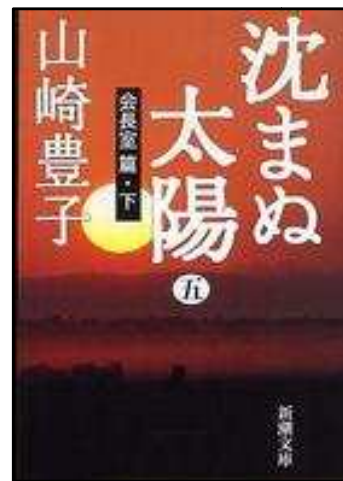
私が初めて読んだ山崎豊子の小説は『大地の子』である。単行本



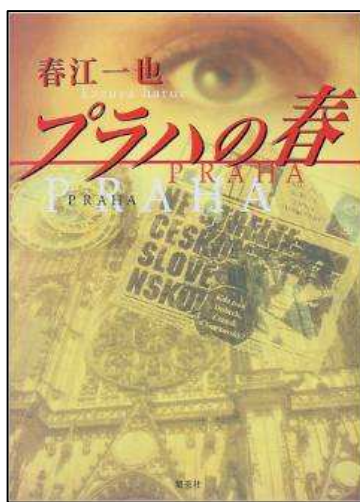
# 献身的な愛を書く『春琴抄』稲垣貴子

で全3巻、夢中になって読んだ記憶がある。日本の敗戦後、満州開拓団にいた男の子が中国残留孤児（山崎豊子は「中国残留孤児」ではなく「戦争孤児」と呼んだ）として生きる、中国名「陸一心」日本名「松本勝男」の人生を描いている。中国人の養父母のもと日本人だからという差別を受けながらも立派な青年に育った主人公は中国のために尽くそうとする。文化大革命の波にも揉まれ、命の危機にも陥る。後に日中共同プロジェクトにかかわることとなり、同じプロジェクトにかかわる日本の実の父と再会する。日本の父の「日本に来て一緒に暮らさないか」ということばに対して主人公が出した答えに胸が詰まった。

山崎豊子の小説に出てくる人物、会社、団体などにはモデルとなる実際の人物、会社、団体があるので興味深い。1985年の御巣鷹山で起こった日航ジャンボ機墜落事故がもととなっている『沈まぬ太陽』はアフリカ篇・御巣鷹山篇・会長室篇の3部構成となっており、航空会社社員の恩地元を主人公に描かれている長編である。読み終わったときあの事故の裏側をすべて見たような気がした。まるでドキュメントかと思えるようなタッチで物語が進むのだが、「沈まぬ太陽」の意味について「そういうことか！」と理解できたとき、やはりこれは壮大なテーマを持った重厚な小説だと強く感じた。「何一つ遮るものがないサバンナの地平線へ黄金の矢を放つアフリカの大きな夕陽は、荘厳な光に満ちている。」物語の終わりに、このアフリカの風景と、不条理なことは決して許さない、いつも沈まぬ太陽を心にもって生きている主人公恩地の姿が重なった。



以上のように、山崎豊子の作品はひたすら尊敬の念を持って読む。しかし何だかんだ言っても私は、最初に紹介した『春琴抄』もそうだったが、恋愛絡みの小説を好んで読んでいるような気がする。というわけで私のイチオシの恋愛小説を紹介して文を閉じたい。



史実にのっとった国際的ラブロマンス、春江一也著『プラハの春』は感動的だった。この小説を書いたとき作者は現役の外

交官だったそう。主人公は「堀江」という外交官で、筆者は「春江」。もしかして本当は自叙伝なのか。そう考えると何か見えていけないものを覗き見るようなわくわく感でいっぱいになりつつ内容に引き込まれた。おまけに旅好きの私はプラハの風景を思い出してテンションが上がった。読み終わってすぐに「ぜひ読んでみて」と友人に薦めたものだ。時代背景や設定は違うものの、漫画でいえばなんとなく池田理代子の『ベルサイユのばら』っぽい香りがするなとも思っていたら、宝塚が舞台化したので「やっぱりな」と笑ってしまった。